

バリのムスリムの太鼓ルバナ

ムスリムが多数派のインドネシアにおいて、ヒンドゥー教徒が人口の大半を占めるバリ島。そこに暮らす「少数派」のムスリムたちにとって、杵太鼓ルバナの演奏はどのようなものであるのか。



嫁迎えに出かける人びとの列。ルバナを持った女性たち（ニユリン村）

ムスリムの嫁迎え

強い日差しを、真っ赤なそろいの衣装を着た女性たちが小型の杵太鼓ルバナを叩いて歩き、その後を人びとがついていく。しんがりは分厚い大型のルバナと、大正琴に似た楽器マノリンを抱えた男性の楽団だ。彼らはバリ島東部・カランガスム県のニユリン村の人びと。明日の結婚式のために隣村に花嫁を迎えに行くところだ。花嫁の家に到着すると、人びとは茶菓でもてなされ、歌と踊り、演奏を披露した。話し合いの結果、無事に結婚が承認されると、赤い衣装の女性たちが花嫁の腕をとり、人びとは再びルバナのリズムとともに、にぎやかに村へと帰っていった。

ニユリンは約二〇〇年の歴史をもつムスリムの集落で、その始祖はお隣のロンボク島から渡ってきたササク人である。男性たちが演奏する大きなルバナは、彼らの先祖がロンボク島からもってきた伝統的な楽器である。バリ各地に点在するムスリム集落はそれぞれ祖先や歴史が異なり、そうした違いを反映して、構造もサイズも演奏法もさまざまなルバナが演奏されている。

ヒンドゥーの島のムスリム

バリはヒンドゥー教徒が人口の約九割を占める「神々の島」であり、その豊かな芸能文化は世界的に知られている。青銅の器楽合奏ガムランや華やかな伝統舞踊は寺院や個人宅で催される儀礼のためだけでなく、観光客のためにも頻繁に上演され、絵ハガキやポスターにも登場する。しかし対照的にバリのムスリムの音楽や芸能は、ほとんど注目されてこなかった。

バリの多数派であるヒンドゥー教徒のなかには、ムスリムを「よそ者」と軽蔑する人もいる。たしかに金を稼ぐために他島から移住してきて、低賃金労働につく新参のムスリムも多い。そもそもインドネシア全体ではムスリムが圧倒的に多く、ヒンドゥー教徒は少



マウリッドのルバナ演奏と賛歌の朗誦（プガヤマン村）

数派なので、ムスリムに対して不安や反感抑圧を感じがちである。インドネシアでヒンドゥー教徒が多数派なのはバリ島だけ。だからヒンドゥー教徒の人びとが「バリ＝ヒンドゥー」のイメージを強調したくなるのも心情的には理解できる。

しかしバリにはニユリンの人びとのように、数百年も前からヒンドゥー教徒の領主や近隣の人びとと平和に共存してきたムスリムもいる。彼らは決して新参の「よそ者」ではない。宗教は異なっても、彼らもまたバリで生まれ、バリで育ち、バリ語を話すバリ社会の一員であり、ガムランとは異なるルバナの響きも、バリ文化の一部なのである。

マウリッドのルバナ演奏

バリのムスリムの芸能がもつものにぎやかに上演されるのは、預言者ムハンマドの生誕を祝うマウリッドのときである。賛歌が朗誦され、ルバナ演奏や舞踊が上演されて、集落は祝祭的な気分にも包まれる。近隣や他村からも招待客や見物人がやってきて、集落は外に向かって開かれる。バリ北部のプガヤマン村のマウリッドでは、ルバナ伴奏で伝統武術シラットの試合がおこなわれ、かつてはヒンドゥー教徒を含め多くの人びとが遠方から腕試しに集まったという。南部のクパオン村では、造花とゆでたまごで飾ったパレスジという担ぎものが、ルバナ演奏と踊り手たちに先導されて、近隣をパレードし、見物客を集める。



シラットの試合とルバナ演奏。シラットは二人ともムスリム（プガヤマン村）

いくつかのムスリム集落では、マウリッドのようなムスリムの祝祭だけでなく、ヒンドゥー教徒の領主や僧侶の儀礼でもルバナを演奏する習慣が見られる。そのような儀礼での芸能上演は、集落同士がお互いに敬意をあらわし、友好関係を切り結ぶ場にもなってきた。最近では政府主催のフェスティバルなどでムスリムが芸能を上演することも、少しずつ増えている。ルバナはバリのムスリムにとって、ヒンドゥー教徒とは異なる自らのアイデンティティを象徴するものがある。そして村の外の演奏は、自分たちの文化を誇り高く表象すると同時に、その上演をとおして、自らもバリ社会の一部であることを人びとに理解してもらううえで、貴重な機会なのである。

増野 亜子

ガムラン演奏家／東京藝術大学非常勤講師